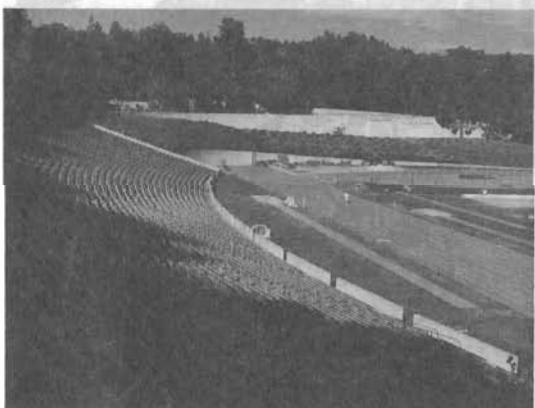


海外レポート

すばらしいアメリカの選手たちが、日本を訪問する機会を得た。彼らは、日本の選手たちの練習量に驚いた。日本選手は、一日中野球場で練習している。しかし、彼らは、日本選手たちの練習量が過度であると指摘した。日本選手たちは、一日中野球場で練習しているが、これは、日本の伝統的な考え方によるものだ。日本の伝統的な考え方では、「一日も早く結果を出す」という精神が強調される。しかし、アメリカの考え方では、「練習を通じて技術を向上させる」という精神が強調される。この違いが、日本選手たちの練習量が多い原因である。また、日本選手たちは、フォームに問題があると指摘した。日本選手たちは、フォームが正しくないために、野球の技術が発展しないと指摘した。日本選手たちは、コーチされすぎると指摘した。日本選手たちは、コーチが常に監視していることで、自分の技術を発揮することができないと指摘した。日本選手たちは、一年中同じ種目をやっていると指摘した。日本選手たちは、一年中同じ種目をやっていることで、他の種目の技術を学ぶ機会がないと指摘した。日本選手たちは、練習するしかないという考え方があると指摘した。日本選手たちは、練習するしかないという考え方があることで、他の方法で野球の技術を向上させる機会がないと指摘した。日本選手たちは、練習するしかないという考え方があることで、他の方法で野球の技術を向上させる機会がないと指摘した。

このたび、ようやくその念願がかなって
1988年5月20日から同年12月26日までアメリ
カのカリフォルニア大学ロスアンゼルス校
(通称 UCLA) で「球技運動のトレーニン
グの研究」をさせてもらうことができた。



UCLA 陸上競技場

フットボール、バスケットボール、バレーボールのトレーニングに参加するとともに、

力の学生スポーツ

教育学部 西 村 清 巳

多くの競技会を見て來た。それらの施設、設備、組織、制度、コーチングセオリーを學んで行く中で、多くの新發見をするとともに、日本のスポーツ批判に対する解答をも得たよ

UCLA のスボーツ

1988年のソウルオリンピックにおいて、UCLAの卒業生と在校生は、11種目にわたって16個の金メダルを獲得した。これがあまり大騒ぎすることもなく、クラブ活動の中のひとこまとして存在しているように見受けられる。

UCLAは、州立カリフォルニア大学9校の中の一つであり、13学部、専門分野200を持つ総合大学である。学生数は約33,000人である。エクステンションセクションが学部以上の組織を持っていること、学生の厚生施設が充実していること、アスレチックセンターが非常に大きな組織を持っていることなどが注目を引いた。

とくにアスレチックセンターの組織はすばらしく、事務職員60名と64名のコーチングスタッフを持っていた。年間予算は20億円以上になるそうだが、ほとんどの収入が競技会の入場料とTV放映料でまかなわれる。

スポーツ施設の主なものをあげると、体育館は、観客12,000人を収容できるポーリーパビリオンを中心に四つ持っており、すべて冷暖房完備である。トレーニング場も二つの体育館に併設している。プールは、屋外温水プールを四つ持っている。その他の屋外施設は、陸上競技場、フットボール場、サッカー場、野球場、ソフトボール場、テニスコート(19面)、多目的フィールド等を独立施設として

持ち、テニスコート（ハード）の他はすべて芝生である。日本の大学に比べて質、量ともにけたはずれの充実ぶりである。日本の大学のスポーツ施設の貧弱さを思い知らされた。



USA オリンピックチーム監督ダンフィーと運動クラブの管理・運営は、アスレチックセンターが行っている。コーチングは、各クラブ専属のコーチ（1クラブ2名～10名、収入の多いクラブほど多い）が行っている。毎日綿密な練習計画のもとにトレーニングが展開されており、競技の勝敗は正にコーチングスタッフの頭脳の勝負といった感じである。練習内容が実に合理的で、中味の濃い練習が繰り返されている。部員が30人いようが100人いようが全員均等に練習の機会が与えられる。上級生への礼儀とか、監督への気遣いとか、スキルの上達に関係しないものは一切存在しない。練習時間内は、チームスキルの向上に全力が注がれる。

日本のコーチングときわだって違うところは、コーチが全く怒らないことである。選手のプレーを褒めることに徹している。ことに精神的なことで選手に文句を言うことは全くない。「全力でやること、頑張ること」は個人の問題であって、外からとやかく言うことではないのである。

大学生の場合、1種目のシーズンは6か月であって、1週間5日、1日2時間～2時間半の練習時間はきちんと守られている。活動期間、試合数、最低学業成績等はすべてNCAA（全米大学体育連盟）のルールで決

まっていて、そのルールを破ることはできない。すべての大学が共通の条件の下で覇を競うという姿勢が色濃く現われている。シーズンオフは、別のクラブに所属したりして個人的に自分の専門種目のスキルレベルを維持するために努力している。高校生の場合は、1種目のシーズンがもっと短いため、数種目によわたってトッププレイヤーになることがまれではない。日本のように1年中同じ種目をやっているのに比べると、ゆとりがあり、常に新鮮な気持ちでとりこんでいるように見える。個人が持っている多様な能力を開発するという意味からしてもアメリカの学生スポーツの制度は優れているように思う。卒業した後も長くスポーツを継続しようという意欲を持たせるためにも、個人の能力を大きく育てるためにもいい制度ではあるまい。



UCLA フットボールのボス・ヴァオファオとNCAA の組織と活動

NCAA の組織は、1905年ルーズベルト大統領の呼びかけでできたものである。毎年、大学フットボールで大量の死傷者を出しているのを、のばなしにできないという考え方から出発したのである。

アメリカでは、あらゆる施設をそろえてコーチを雇い、高い奨学金を使って選手を育てているのは大学である。AAU（全米体育協会）は、選手強化の現場を持たないので、オリンピックや世界選手権のたびに大学から選手を借り出すことになる。事実、過去にアメリカが獲得したオリンピックメダルの95%

は大学選手によるものだと言われている。

NCAA は、専従職員 70 人以上を持ち、執行部、事業部、審査部など五つの専門部を持つアマチュアスポーツ最大の勢力である。シーズン制、選手の数、コーチの数、学業成績基準、スポーツ奨学金の給付枠、新人スカウト等こまかいルールが決められている。

ルール違反に対しては、NCAA 審査部が調査して、違反大学にはプロペーションが科せられる。

スポーツ有力校は、体育局の予算を独立採算制でやっている。コーチの給料も体育局が独自に決める。コーチングスタッフの人員費が年間の体育予算の大部分を占めると言われる。

二つのハイデガー生誕百年記念の国際学会

総合科学部 小川 侃

今世紀の最大の哲学者といわれるマルテン・ハイデガーの百年目の誕生日が、今年めぐってきた。すでに年頭にミュンヘン大学の哲学科で記念の学会が催されたのを皮切りに、多くの記念の学会が催されたし、また催されつつある。それらのうちで最大の規模の国際学会は、「ハイデガーのアクチュアリティ」という統一テーマのもとに西ドイツのアレクサンダー・フォン・フンボルト財団がボンで開催したもの（4月24日から4月28日まで）であろう。更に、ドイツ現象学会も5月16日から19日まで「現象学とハイデガー」というテーマのもとにヴッベルタールで記念の会を開いた。私はこれらのうち最後の二つの会議に招かれて講演し討論に参加した。これらの会議の概要を報告することによって、少なくとも日々日本を離れていたことの責任の一端をおおうことができれば幸いである。

まず、ボンのフンボルト財団の主催の会議はつぎのようなものであった。質の高い奨学生研究員を諸外国から採用している同財団が西ドイツを代表するハイデガー研究者であるペゲラー (Pöggeler)、ヘルト (Held)、ヴィッサー (Wisser) と共に、過去の研究員のなかから重要な人々を再招待し、かれらに加えて、ハイデガーの直接の弟子であり、哲學的

解釈学の創設者のハンス・ゲオルク・ガダメー (Hans-Georg Gadamer) とハイデガー全集の編集総責任者であるフォン・ヘルマン (Von Herrmann) などをも招待して、ハイデガーの現代的な意義を問うという会議であった。日本から講演に招かれたのは、私の他に新田義弘、竹市明弘、有福孝岳、三島憲一の諸氏がいた。世界の各地からボンのバート・ゴーデスベルク地区（いわゆる連邦共和国の政治の中核部があるところ）のゲストスタッフ・シュトレーゼマン・インスティテュートとよばれる会場に、60人以上の発表者と30人以上の討論参加者が集まった。日本からの討論参加者には、谷嶋氏（東大教授）や學習院の門脇氏、神戸大学の大河内氏などが居た。（ついでに申しあげておくと、この会場は、食事も宿泊もできるようになっている会議場で、我が広島大学にもこういうのがあれば真の意味で国際交流の基礎となるとおもわれるような場所であった。いうまでもなく国際会議では、未知のひとと一緒に飲食をともにし議論を交わすということが重要だからである。宿泊場所が異なるのでは時間を心にかけて話をしなければなるまい。特に我が広島大学ではバス・電車の便を気にせねばならなくなるだろう。）